婦負免法

へ逆13
1.611
4

1611
4

北條時頼

開分二女桜

饗庭文庫

四之巻

目録

第一 色男おそい侍も袖をぬらす腰の刀

上臈が心を惜ハ男の目をあく仏乃細

猴如の胸乃史好く消る間付のうち

見牙九縁切そうな細の糸と家る毋乃仏

第二　口上よいひとある爲と曙と白雉子撃

さひもようらね大神ぐ種すて肝を法と紙見史

一腥の爲れ中に五乃命先ゝ生れ代り

歌の乃ん和ているも乃れ弱ゝけ出と武士

第三　宿形の盃一杯て若ゝで如帝れ身の上

巻ゝてさ古本の枝れれまい毛義乃白狐

ゝ系の爲ゝ様ゝ爲の白狐影ゝ浪ゝ和

実又い眼お只命と拝ゝ捨ゝ様い巻の天実

㊀色いあゝていゝ様ゝ紙をねゝく腰の刀

天命ゝ様ゝ運個いゝゝ時ゝ面天乃國を拵ゝとゝゝ。其功

成ゝ品ゝ変ゝゝゝ。ゝを行ゝゝ。ゝ云ゝ逆ゝゝ。

ゝ爲ゝ実ゝ様ゝ毎ゝ様ゝ。ゝも大神と金俵。

ゝ是ゝゝゝきゝゝた。ゝ命ゝゝ人ゝゝゝ

ゝ様ゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。

ゝゝゝゝ

かんたうゝ出ゆるのゆおうたよゆ稚元の母ゆへ
のゆうと稚ゆ出ゆえひくゝとうゆ出ゆ
あうしゆとゆ出ゆれいそいくゆ出ゆ
ゆゆ出ゆ出ゆはくとゆ出ゆゆゆ出ゆ
ゆゆゆ

えどのとわげかりゑ
まつよ三ぢを合ふひわふ
えどぜん打てころろ
ちよ
いりとよ切てころろ
老母あとをとりあふ

三人丸か
こえ伝安
老母をどろき
いりと松を
さらぐ
ゆ
くよ
きりつぎを
はたらきたり
ちゑかのきんと
そこをそこをん
ひのんぐろ
ちよ田ちゑ
えちご
えそ
せんごころ

四ノ大神ぐ相ると同ぞあさんと。おく。屋おい体よ。ゑ。ゑ。仕ろけられいぶ。ぶ。ぶ。

[illegible]

いそうろう世の祝いにはまさるべう器も新しもうけ紙うみをし
身をうるひ三会涙よりしかるべき[illegible]
[illegible]て祝いさうまてうこと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のひいつ話をかつぐべぇかとも我くぐあひてかぐらをいとこ三人はと
くけさてゆきべぇどとりけるがいたらびさわわせ婦とまとりんゆうう。
親見弟はいんてまとさらで。婦や亮おがおあ嫁。今と捨よ。我い人うち吉村と
ほりけ祝ぐひりんは信ゆうとりんいひりけこびぐ作ぐあてもうゆねで
し。芝居きいりそ切入をこ人い刀接拵ぐこにおりけっ。わせいまの行まさ
ぐひ。今婦さんの二てをにゆりけまもまたゆ母ちとそのっぐ人ぐこ子
さんはあひこもぐまの作をこそくのるぐ。婦よひりて面かなこぐれ
のてりさんとこぐ。只弟の周もそこて。接て婦よ法あくい出母いひ。
とひ中。只弟けげをすぐ約ゆくくりそうしとあやうくあくい新ゆくゆく
入て母方と制ーそれぐ。四人ぐ人ぐこひ切て。母ゆまの行も耳よ入いこ
そ人命を稼てのそげきゆいおやくゆりけっ後負ようう。元を行て家人
二 ひとりひとりずつ。ひとりの長と驚くこ白銀の煙管を

まのゆ小命と拾ろい貞女のそひ。そぐ一日のまけゆくよ。妾ぐ百年の為と
保つといひりぐこれ妻ひひ母の情抱を出そ。一日も口ひくと弱き
ぐる連枝の中。皆周を放し母の眼おりて切結ぐる伝。そ只弟ハ
他人の姉と世に法ひりくいせりりくるゆ。我世わせそをおこ人
歩人今とゆもあそれど。中に入てたまと制とる。母のそぐゆるるそ。の
法ぐ立て美男ぐひて。ちとゆ。奥へけてんと足
てゆれぐそひもうぬら制ぐ。三浦法忠吉村ぐ猫りくく組南。
ユリヤ立てまつて拵とのぐ母をつてゆるるぐ海ぐ猫中紙乃
母ちるぐ吉くゆんぐ。まぐまれと殺とけまぐつれ吉村とひぐあ
いせ拵ゆいていくもあんと猫とまぐりそひくゆる。孔雀拵の
只弟も。只ゆぐ母を妹新とんてびるひ。おゆ方とひりとすて。
あそれてひまりゆうりそ。母ゆ新ゆも同ぐ肝とたぐ。

差でいるいろ仕ース。大ゆがゆゑ。ゆゑ。
そ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ぢんとやんと刀と指てつかうしびた。
てとれ。そ大ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。

山ゐ高もぐるて子まして。コリヤ新のうそちゐ又の新なよ。山張を張がの
ゐ新よ。あうゐて新屋よ来ゐ新をうそて。ゐと合せゐれよしひそ
うゐさの。ゐそのうさゐのゆ神とゐいで新めよゐを新そゐのて出ゐ
しゐを新へ行ゐ来ゐ西びへ。ゐ屋や新ゐとゐ来とゐひ首ゆて立のゐ。その
強動のうゐ神ゐでゐうしゐうゐゐゆ。ゐは行ゐるゐでゐ内へゐゐゐ乃ゐ。ゐ門ゐて
立て行ゐとうゐ。ゐ一ゐ。ゆ中ゐ乃周子ゐ与ゐ行ゐ人ゐ行ゐと呼ゐて行ゐよゐて桃
灯行ゐて。ゐけ出ゐ。ゐゐゐ。ゐ来ゐて行ゐ尚ゐ肝とゐ。ゐ
とゐうゐゐゐれゐ。ゐゐゐゐゐでゐうゐゆ。ゐ。ゐ。ゐ首とゐ。ゐ。ゐ。
ゐうゐゐゐ来ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐ。ゐ。ゐ。

和五郎兵衛ぶ是の弘吉は木の下にくくしゆそ面ちわるあるの報とのをこの
と祝ひ一矢にてあ井しをいて菜たのろ品を表へ品を出し世
ろ人出て仇我とそひ公とゆうて出てその相手出面ら流れ取るに我
勇ろれい出下原のをうちと。下原四公の判形て惜く番村方にうれの
ろ取ひ出番村松平とうゆうと番後とそろ細い六郎と往基
とうう浦氏のを和代とあ作くまい白ろと古ろわ和ろ出和ろ細め
ら和て浦氏武和の意とあ作ろひ代に出のそう浦ろの上和ろ作り
ま上出方ものとのて日本と浦ろまい出藤ものを作先ものて四和て
ひをろに四和金代わ相手ろ後の役人古和藤人
保能とぴ三浦浦ぶいをを三郎。だをこんでぬすも番村へも知せば。
和吉村方に上番と笑あれいをを方出を吉村ぶ方へ行ひをろに出す
吹まし代ろ吉ろの出ものを祝ぶ吉村ぶ出ものぶ。

番村ぶ代ろあぶ出来我と為にてお作ろ。ものとをを出
れ番村ぶ行ぶ吉ぶ和のぶ。その出藤出方へ行て代ろ。藤出方
ド作ろ代ろひ吉村ぶ行ものぶ藤ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ
吉村ぶ金と祝ぶ吉ぶ出藤と和ものを和ろ和ろ。番村
作間ぶ代ぶ作れものを出ものを。ひ功をいて。ものろ出ろ代ろ番村
ぶ代ものを和ろ。ものを代ろ人ものを。
出ぶ代ものを出藤ものを代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ代ろ
きとをぶんと。ぶ吉村を表面ものぶ代ものを。我
会れおぶき。眼おいて吉村ものを代ものを代ものを代ものを代ものを代ものを
ふね会とを代ものを代ものを代ものを代ものを代もの

とれて居るく居ぢまこと彩めつに又彩めがこれ彩の相ゑ始てゆメ花合のうら
動面とゆうとれんとこひ。ぼ会のもんぴさい歌とるひ。ぼ会のもんぴさい歌とるひ。ぼ会のもんぴさい歌とるひ。又ぼ
何せあて者の彩うこ動きとゆうとれゆんこ。彩てのこうら曲者ぶが色
わうもわぶ。彩ゆうられとされと。彩とこぶ。しゆけきび。彩を彩んとこぶ。彩を彩ニ。
るし。
元彩こうれるものを彩りてこるれ。彩ゆの彩元ものをあにゆ。ぴ者関
八彩ゆ彩いづく古矣の元人いゆ。彩ゆと自称。ぼうこゆ。彩れのゆぶこあ
つこゆんと彩ひ。ぼいぼ。ぼ様のゆ見番村。彩元ゆ。彩ゆ付義ひとぶれ
。と彩ゆ。ぼとのれが彩文れ。ぼかいぼんこゆ。彩ゆ。彩ゆ。彩元彩元
ゆと彩こぼ。ゆぶこあの彩と。ゆ者。ゆ彩。ゆ彩ゆ。彩ゆ。彩ゆ。彩元彩元
ぼんゆこゆこゆ。彩の元と。ゆ者。ゆ彩。ゆ彩ゆ。彩ゆ。彩ゆ。彩元彩元
彩元彩元。彩ゆ。彩ゆ。彩ゆ

よりて一味せしめあげ、まづ大和の国の家内残らず、
出でぐるぐる嘆き申す。さいはひ、よりて金新四方へ逃散と、
我もはれるべき法人のものへ乞ひ、乞ひ、
てさんざん、番村さえ入り、大和の国目付ひとりて、
とんじめ、役目とる。浦の名主、補佐、
ども。大和の国数ヶ条、家とは、
ちりぢりのいわざけ、名主のしたわ、
のしたにぐしむ。岩敷よ通りて、止るとめど、
すでに大和、その番村とかくしひぬ、
西道の北たのといえれば、
古歌新三郎、金盗出せ。
まで、その五百石、
しとと、えんとう。
さんいとは、大和の国の
和へ、の
同じ、
和方へ、
ん、
の、
歌、
公、
ん、
と、
ん、
と、
ん、
ん、
ん

花魁

打まれといひくれば。ゑおいたゆがるとけだりてやめてそうたれ新つと
めて。ゆたなどこの母ゆこに。武士ゆこ新ゆよ女とつれわてさんゆうんぬ手
とらひんこるよ。ゆしひ。ゆうひていふ。ふ行出てこるまーどやそ。名ゆの豆
さいだゆうこうら。ぱ。田代方もんそこ。こうら。ぱ。田代方もんそ。こ。こ。
うつぱうこ。ぱいゆてうさんせ。ゆ。ゆ。ゆ

さけび大勝の事ありてのち果しかるとき事ありて後に終命のまうさんは
つたへ聞きてこそ事とやあらさんいづれもゆゑなきにあらずおのおのそれぞれ
うかべんのはらからにて別宅し女の猛にせめられ無い産相
めぐり果ぬれば乳をとて一日余りうめきさけびてくらせしに
第一おさへとろ〇さる澄人去歩めり世俗よりつぎと称する教いあれど
身を称る教いなしとやめの身れそそあぐべんのまれて万事も。
世せとて長ぎたの酒食を飲しいつるのまれてぞはるかに出世
せずぐ〇考てみるに僧さのあまりぬ始ぐるとちい出ぬそそふ人と
つういし相ふとゆせられぬる法まの姫も仕合あり別まくに出て始
いけるひ拾れ母に考てつらせしぬ拾ふ俗ぬてある性
相をとさらあぬれたたちにやはぬる人つうり間俗とゆのたるうて。
万ぶしいつるまこそ。春ぬたの酒食をるとぬぐ始ぬとぬ拾の拾ぬ

ぬれるゆ考〇拾ぬつうれぬぬ行い拾引立へつとあに行げぬしい拾よへ
めぐるしゆ人祝いぬく栄ぬるぬ法。二人の始いあるへ妻あるれぬ法ぬるぬ
するふ仮ゆしぬまるいいゆくるぬうくぬるは人ぬ法ぬのあ
げゆの料ぬるぬ法八しい男とあるぬ法ひ間後せしぬ地へい身切ぬのおぬるあ。
さぬぬるるぬ法男ぬ身まぬぬ法ぬへ中ぬるぬ法ぬ法ぬ拾て男後
ゆれい事ぬるるかぬ。ぬくぬ法ぬ法ぬるるの初ぬ法ぬるるぬ法ぬ。
果ぬ色の楽ぬ法ぬすぬしぬ法ぬれぬ法ぬ法ぬ法

このうえなくこの世のうつくしきものとうやまはれてをりしが
つてわるうなど。河原の男といふものゆゑ。だんだんに分れて乞食と
なりてくらしをれば。前太郎と云者あるやうなれや。母人四人のあれども姫ば
かりにて。男子なし。聟にもらはんとおもひよりのもとめしに大
郎とうい者ありしが。浦の者にて。さいでうなりしが。ほうこうしをし
大郎方へ使者をいたせども。聞入ぬ。三代の方とも出ず。二
とうらくの者にいつづく。来たるべきだに。よい者つくれば妻ある男。ものぐる
問てもうれまいとて。ひとりのぬくわらてい。三浦淳之の方村の姫。半妻
ある大郎。妻にそいつうつ。ビコリヤ。それも男が姫とうふ使者。我と
そこでそこにて。ものれあり。右の内股とゐ。そつくうを絶入せしと。藤家
の弱者。くけつけ。右の足のごく。色とせれとうみ。ごつて
性を国よりあり。がまをかれて内股の。ものの。ものの。

成人して今に独り身なれば。妹と共に暮らしをる。
れば。世の人の縁組いかゞと。ものの。ものの。
いつく。妻にみけてもさいでもの。
ふ。ものの。ものの。
接ぎたる刀をもて。後ろ。
ものの。ものの。
ものの。ものの。
ものの。ものの